卑弥呼の時代 祭祀用？の桃

纒向遺跡 種2000個

女王・卑弥呼が治めた邪馬台国の有力候補地、奈良県桜井市の纒向遺跡（2世紀末～4世紀初め）で、大型建物跡そばの穴から2千個を超す桃の種が出土した。市教委が17日、発表した。桃は古代、魔よけなどに使われたとされ、市教委は「祭祀に使った後に捨てた可能性がある」とみている。

（渡義人）＝35面に関係記事

纒向遺跡からは昨秋、3世紀前半では最大の建物跡（東西約12・4㍍、南北約19・2㍍）が見つかり、卑弥呼の宮殿とみる研究者もいる。市教委は7月から、建物跡を取り囲むとみられる柵列の延長を確認するため南側を発掘調査。その結果、建物跡の南約5㍍で、楕円形の穴（東西約2・2㍍、南北約4・3㍍、深さ約80㌢）が見つかり、2千個以上の桃の種（直径約2・5㌢）が埋まっているのを確認した。

竹ざる6点（直径30～60㌢）や木製の剣、故意に割られた土器片、漆塗りの弓、獣骨なども出土し、いずれも祭祀に関連するという。市教委は土器の形から穴は、卑弥呼と同時代の3世紀中ごろのものとみている。桃の種は弥生や古墳時代の各地の遺跡で見つかっているが、1カ所でこれほど大量に出るのは異例。

古代中国の道教の神仙思想では、桃は不老不死や魔よけの呪力があるとされた。3世紀末の中国の史書「魏志倭人伝」は卑弥呼が倭国を鬼道（呪術）で支配したと記し、鬼道を道教とみる説もある。辰巳和弘・同志社大教授（古代学）は「卑弥呼が竹ざるに桃を積み上げて祭事を行ったのではないか」と話す。

現地説明会は19日午前10時～午後3時。問い合わせは同市立埋蔵文化財センター（0744・42・6005）へ。

纒向遺跡から見つかった大量の桃の種と竹ざるの遺物＝奈良県桜井市、森井英二郎撮影

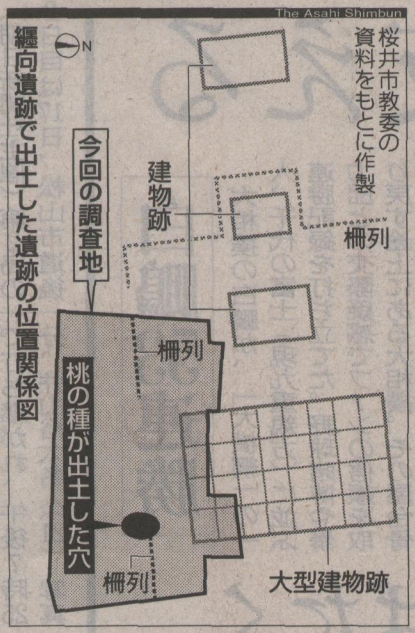
長寿の儀式 食べる？

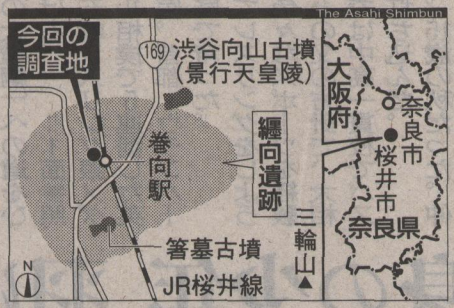
纒向遺跡 桃2000個

道教思想との関連 専門家指摘

奈良県桜井市の纒向遺跡から2千個以上の桃の種が見つかった。桃は古代、邪気払いなどの呪術に使われ、不老長寿をもたらす果物として珍重された。邪馬台国の女王・卑弥呼の宮殿の可能性が指摘される大型建物跡そばの穴から出土したため、研究者は、祭祀をつかさどる卑弥呼との関連に注目する。

（渡義人）＝1面参照





桃は中国原産で、弥生時代に日本に伝わったとされる。現代の桃より小ぶりで、味も良くなかったらしい。今回、果実や皮が残ったものが約50個あったことから、桜井市教委の橋本輝彦係長は「食用ではなく、儀式や祭祀に使ったのでは」とみる。

千田稔・奈良県立図書情報館長は「道教の神仙思想が邪馬台国時代、日本にも普及していた」と指摘する。前期古墳から大量に出土した三角縁神獣鏡に神や仙人、霊獣などが描かれているためだ。

千田館長は、道教では不老長寿の桃を管理していたのが仙女だったことに着目。「卑弥呼が桃を使った儀式をしたのでは。数が多いのは、参列者がお供えとして持ってきたためだろう」と推測する。奈良県立橿原考古学研究所の菅谷文則所長は「不老長寿になるために卑弥呼が儀式で食べ、外にいた参列者にも食べさせたのでは」と考える。

今回の調査では、大型建物跡を囲む柵列の延長（約15メートル分）も確認された。しかし、穴がこの柵列を途切れさせるようになっていたため、石野博信・兵庫県立考古博物館長は、柵列や大型建物がなくなった後に掘られた可能性もあると指摘。「卑弥呼が祭祀をしていたのなら、建物がある時だろう。今回の発見が卑弥呼と結びつくかどうかはわからない」と慎重だ。

纒向遺跡

奈良県桜井市の三輪山西側に広がる東西約2キロ、南北約1・5キロの大規模集落遺跡で、邪馬台国畿内説の最有力地。250年ごろに死去したとされる卑弥呼の墓との説がある箸墓（はしはか）古墳（全長約280メートル）など最古級の前方後円墳6基が点在し、同古墳発祥の地とされる。1971年から発掘調査が始まった。

第3種郵便物認可

大量の土器・木製品も

纒向遺跡 意図的な破壊の跡

2千個を超す大量の桃の種が見つかった纒向遺跡（桜井市）の大型建物跡そばの穴からは、ほかにも大量の土器や木製品などの道具類が見つかった。当時の祭祀の一端がかいま見える一方、意図的に破壊されていたり、一部のパーツしか見つからなかったりするなど、新たな謎も明らかになった。（渡義人）

穴から見つかったのは、桃の種や竹ざる、つぼなどの土器のほか、ミニチュアの甕10点▽黒漆塗りの弓1点▽ヘラ状木製品4点▽剣形木製品1点▽木製横槌2点▽獣骨数点――など。

特徴的なのは、ほとんどの遺物が鉄製の刃物のようなもので寸断され、穴に投げ入れられていたことだ。しかも、通常なら穴に捨てられて割れていても、破片を組み合わせれば元の形がわかるが、今回は意図的に一部分だけを捨てた可能性が高いという。

調査を担当した市教委の橋本輝彦係長は「祭りに使った道具を壊すのは、神にささげる道具を再利用しないという意味もあると思う。だが、一部分だけ捨てた意味はよくわからない」と首をかしげる。

県立橿原考古学研究所の寺沢薫・総務企画部長は「東海地方の土器が異様に多いのが不思議だ」と指摘する。

ミニチュアの甕は東海地方でも、周辺地域の祭祀遺構でよく見つかるという。大型建物の近くであった祭りには、東海地方の人々が深くかかわったのだろうか。

一方、今回の調査では、大型建物跡など建物群の周辺を囲う柵列の延長約15㍍分も確認された。柵の外側に建物跡は見つからなかったため、桜井市教委は「周辺に広く空間をとることで、柵内部の隔絶性を高めている。大型建物などのランクの高さが改めて示されたのでは」とみる。

市教委は、来年度以降も周辺の調査を続ける予定だ。

バラバラに壊された状態で見つかった土器の破片

纒向遺跡の穴から出土した木製の加工品など＝桜井市、森井英二郎撮影